

博士論文（要約）

校内授業研究における研究推進組織の動態

教職開発コース

有井 優太

本研究は、校内授業研究における研究推進組織の動態を解明することを目的とする。そのために、特定の市を対象とした質問紙調査と、その市内にある公立小学校の事例研究を組み合わせ、マルチメソッドを採用した多角的な視点からの検討を行った。そして、校内授業研究の企画・運営を担う研究推進組織について、学校組織の置かれている状況の中でのリーダーシップの在り方と、教師の学習を支える実践知の継承・創造のプロセスという2つの視点から考察を深め、そうした知見が教師の学習研究にとってどのような意義があるのかを考察した。本論文は全4部9章から構成される。

第Ⅰ部第1章では、校内授業研究における研究推進組織の動態を検討するために、教師の学習研究を中心に、学校組織内における教師の関係性、検討会談話における教師の学習、教師の学習を支える文化的ツール、学校組織のリーダーという4つの視点から整理した。そして、本研究の課題として、研究推進組織の内部過程を明らかにする必要性があることと、研究推進組織のリーダーシップと教師の学習との関係を明らかにする必要性を指摘した。

第2章では、本研究で用いる方法を検討した。そして、本研究においては、特定の市を対象とした質問紙調査と、ある小学校の事例研究を組み合わせることとした。市の選定においては、研究推進組織を中心として校内授業研究に取り組む文化が醸成されていることを条件とした。また、事例校の選定においては、千々布（2014）において指摘されている校内授業研究が成功している学校の特徴に当てはまる公立小学校に協力を得た。

第Ⅱ部第3章では、研究推進組織がどのような位置を占める存在であるのかを社会ネットワーク分析を用いて検討した。その結果、以下の知見が得られた。まず、相談相手として学校内のアクターを選択する際には具体的な子どもを想定した内容や、校内授業研究という観点を含む内容が多い。逆に、学校外のアクターを選択する際には、教科の専門性が高い内容が多い。そして、学校外から専門的な知識を持ち込むアクターとして、教科部会のリーダーが挙げられた。また、研究推進組織を対象とした相談内容は全て校内授業研究という観点を含む内容であった。そのため、研究推進組織の教師は、多様な教師が持つ専門性を組織に還元させ発展させたり、学校外部の資源を有効に活用したりすることで知識創造を促していることが示唆された。

第4章では、研究推進組織の会議体において誰が何を議論しているのかをテキストマイニングの手法を用いて検討した。その結果、以下の知見が得られた。第1に、発言数や対応分析の結果より、研究主任以外のアクター、他校において研究推進組織に所属していた経験を持つ教師が重要な役割を果たしていることが示唆された。また、それ以外の教師でも、中心的に議論を進めている教師たちとは異なる内容を話題としている様相が明らかとなった。第2に、構成員の変動や置かれている状況への変化などによって、各年度において独立した議論が行われているのではなく、緩やかなつながりを保持しつつ中心的な議題が推移している様相が明らかとなった。

第5章では、実践コミュニティの理論に基づき、研究推進組織に所属する教師個人の4

年間の校内授業研究における経験を検討した。その結果、以下の知見が得られた。第1に、経験豊富な研究主任がこれまでの経験から、他校での実践の成果を導入することは、実践を発展させるために有効である一方、その人工物が形成されるに至った歴史を共有していない構成員に対して、その背景を共有し、実践の展開の中で意味交渉を継続することが研究推進組織の教師としての学習にとっては重要であることが示唆された。第2に、授業に関する実践知の形成を行っている自身の学習の在り方自体の意味交渉を研究推進組織内で行うことで、教師の学習を支える実践知の形成を行っていることが明らかとなった。そのことから、授業に関する実践知の形成と教師の学習を支える実践知の形成が不可分な関係にあり、両側面での学習は意味交渉によって相補的な関係として結ばれていることが明らかとなった。

第Ⅲ部第6章では、校内授業研究において、校長や研究推進組織によるどのようなリーダーシップが有効であるのかをマルチレベル分析を用いて検討した。その結果、以下の知見が得られた。第1に、本研究の調査サンプルにおいては、校内授業研究におけるリーダーシップや学習認識は、学校間ではなく、学校内における差として表れていた。第2に、知識創造におけるどのフェーズにおいても研究推進組織の分散型リーダーシップが学習認識に対して有意な影響を及ぼしていた。一方で、研究推進組織の垂直型リーダーシップは共同化、連結化、内面化のフェーズにおいて学習認識に対し有意な影響を及ぼしていた。第3に、校長のリーダーシップは単独では、SECIのどのフェーズにおいても学習認識に有意な影響を及ぼしていない。しかし、表出化と内面化のフェーズにおいて、研究推進組織のリーダーシップと各フェーズでの学習認識との関係は校長のリーダーシップによって調整されていた。ただし、表出化のフェーズにおいては校長のリーダーシップと研究推進組織のリーダーシップが同時に認識されている場合には有意に負の影響を及ぼしていた。

第7章では、P. Gronnのハイブリッドリーダーシップの概念を手がかりに校内授業研究における研究推進組織のリーダーシップ実践を検討した。その結果、以下の知見が得られた。第1に、知識創造において重要な場であるとされている表出化・連結化の場で研究推進組織の教師は、リーダーシップについての認識を最も多く語っていた。第2に、研究推進組織の教師は知識創造を主導するために、1)個人に対するアプローチ、2)集団に対するアプローチ、3)ツールを媒介としたアプローチを使い分けていた。第3に、研究推進組織のリーダーシップ実践は、ケアや配慮により教師集団の情動的な側面にもアプローチしつつ、実践を主導する立場として垂直型リーダーシップや分散型リーダーシップを発揮することで知識創造を導こうとする複雑な様相を呈していることが明らかとなった。

第8章では、J. Spillaneの組織ルーティンの概念を手がかりに研究推進組織の企画・運営する校内授業研究システムと教師の学習との関係を検討した。その結果、以下の知見が得られた。第1に、研究推進組織のリーダーシップ実践において組織ルーティンに埋め込まれたツールやタスクが重要な機能を果たしていることが明らかになった。第2に、校内授業研究における組織ルーティンの企画・運営及びルーティンの遂行によって教師は、教

教師の学習を支える実践知の学習を行っていることが明らかとなった。第3に、組織ルーティンに埋め込まれているツールを産出することで教師の学習が生起していることが明らかとなった。また、産出されたツールによって研究推進組織は組織ルーティンを再構築していることから、研究推進組織のリーダーシップと教師の学習は相互的な関係にあることを論じた。

第Ⅳ部第9章では、校内授業研究における研究推進組織の動態について、以下2つの視点から考察を深めた。第1に、研究推進組織の内部過程についてである。校内授業研究において、専門知を学校組織内に循環させる役割を担う存在として位置づけられていた研究推進組織は、校内研修経営を行うための会議体において、事例校の研究視点に関わる内容について多くの議論を行っていた。さらに、会議体において話題にされる内容は、研究推進組織の構成員や学校組織の置かれている状況の変化に伴い、各年度において独立した議論が行われているのではなく、緩やかなつながりを保持しつつ中心的な議題が推移している様相が示された。そうした会議体における議論で、教師の学習を支えるための実践知が共有されることや、自身の教師としての学習を省察し、言語化する経験をすることで、教師の学習を支える実践知の継承・創造がされていることを論じた。

第2に、研究推進組織のリーダーシップ実践の様相についてである。研究推進組織以外の教師の認識からの検討においては、校内授業研究におけるどのような場においても、研究推進組織が分散型リーダーシップを発揮する／発揮していると認識されることが、研究推進組織以外の教師の学習認識に結びついていることが示された。そして、知識創造において重要な連結化場面において垂直型のリーダーシップを発揮することも重要であることも示された。しかし、暗黙知を言語化し形式知として集団的な知へ変換する表出化場面においては、校長の垂直型リーダーシップと共に認識される場合に教師の学習認識にとって負の影響があることも示された。そのため、知識創造を行う研究推進組織のリーダーシップの在り方や、研究推進組織のリーダーシップと校長のリーダーシップとの連携について論じた。また、研究推進組織の教師がチームとして、分散型リーダーシップと垂直型リーダーシップを使い分けながら実践を主導しているというリーダーシップ実践の複雑さについても論じた。

以上の本研究で得られた知見の意義について、本研究の試みは、これまでの教師の学習研究とは異なり、①実践現場に文脈として埋め込まれている、教師の学習を支える実践知を抽出し知見を創出しようとする試みであること、②学校組織の動態の中での教師の学習の様相を捉える試みであることを論じた。

今後の課題としては、①コロナ禍以後の校内授業研究の展開、②教師の学習の場の多様性を踏まえた検討の必要性、③知見の一般可能性、④管理職と研究推進組織との関係、⑤理論の精緻化の5点を挙げた。